10A

あの東面回廊とともに倒壊！

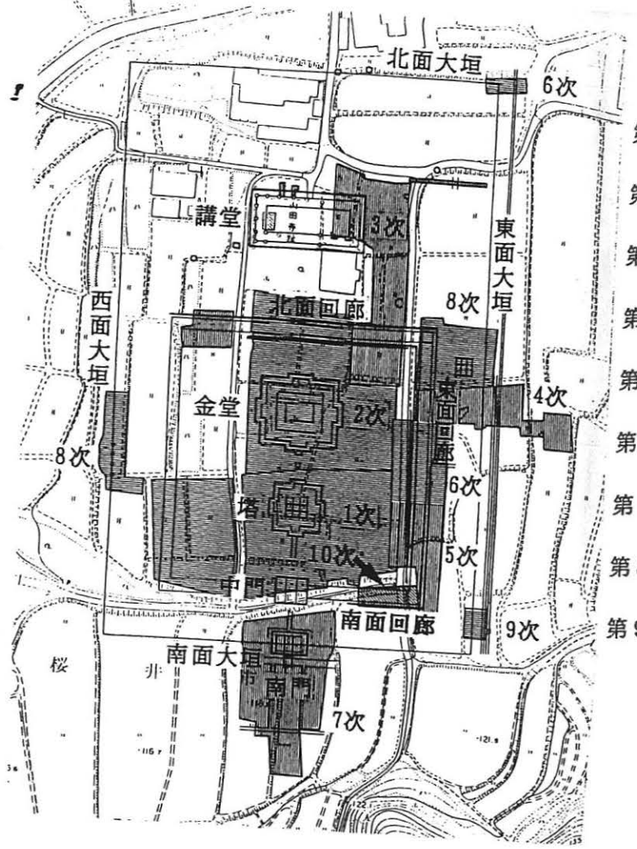
山田寺南面回廊

第10次調査現地説明会資料

1996年6月15日

奈良国立文化財研究所

飛鳥藤原宮跡発掘調査部



第１次　中門・塔・西面回廊
（1976・4～12）

第２次　金堂・北面回廊
（1978・2～10）

第３次　講堂・北面回廊
（1979・5～9）

第４次　東面回廊・東外郭
（1982・8～1983・1）

第５次　東面回廊
（1983・5～10）

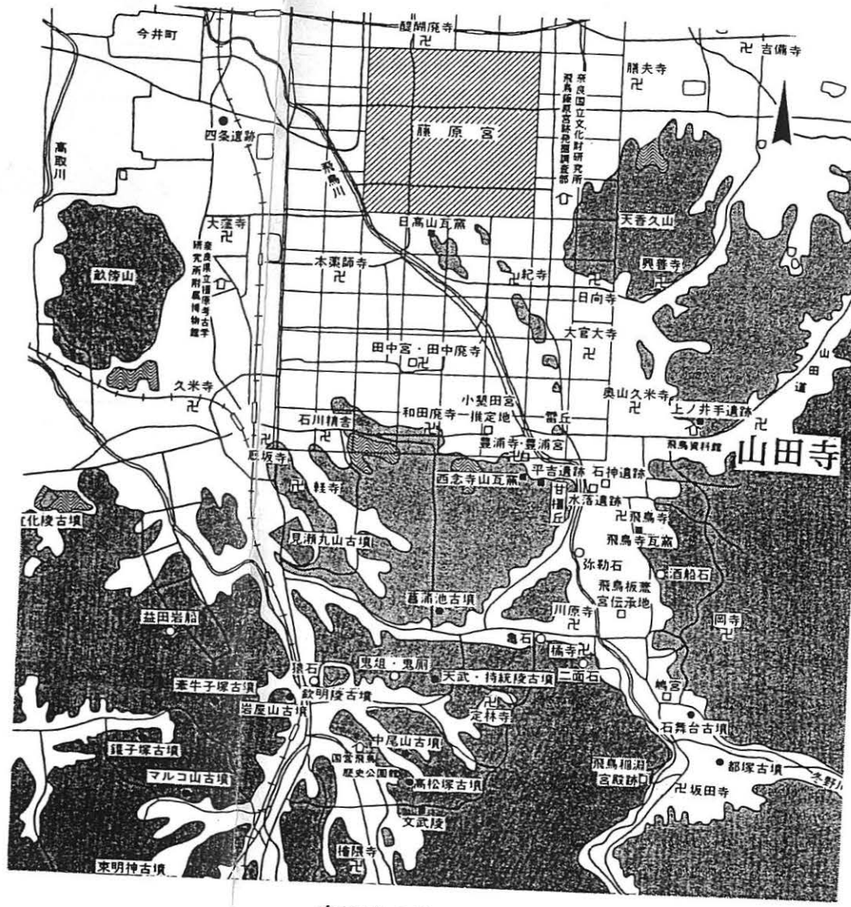
第６次　東面回廊・寺域東北部
（1984・8～12）

第７次　南門
（1989・10～1990・2）

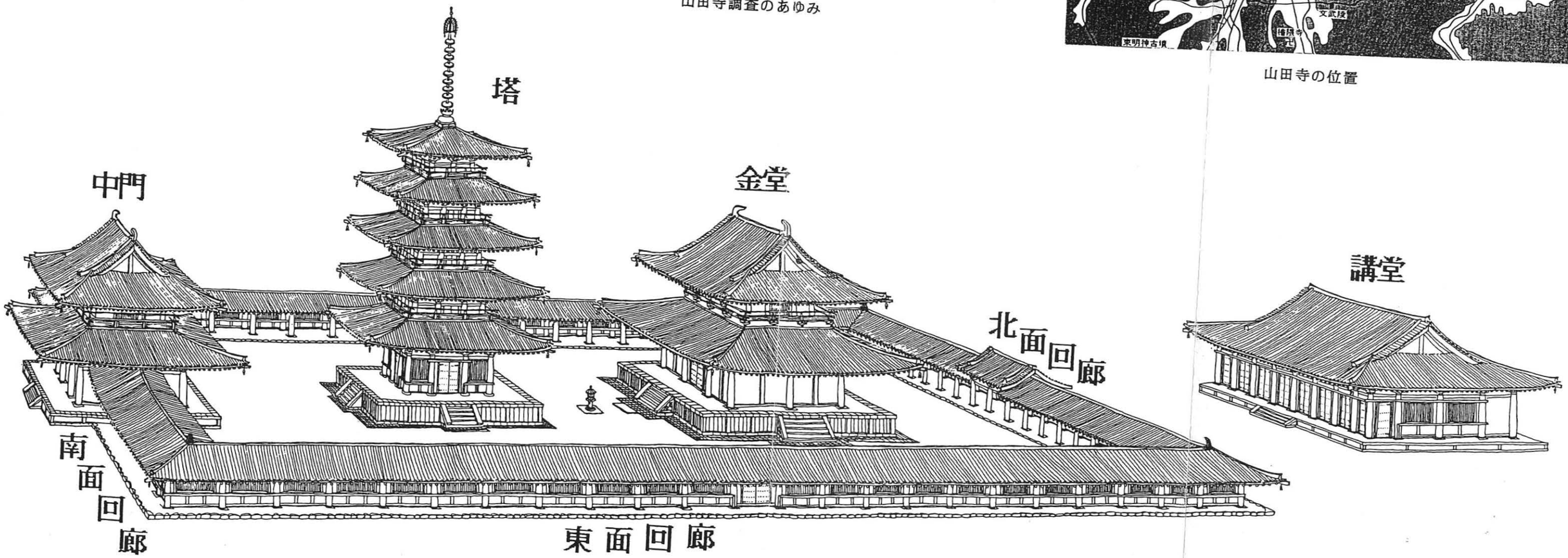
第８次　東面回廊・宝蔵・東西外郭
（1990・8～12）

第９次　東外郭
（1994・11～12）

山田寺調査のあゆみ



山田寺の位置



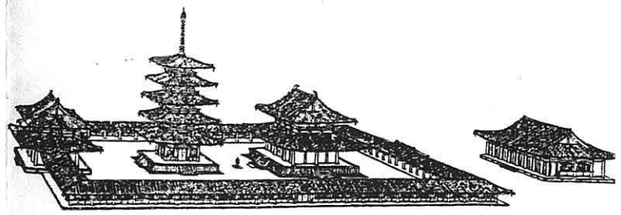
山田寺盛衰の歴史

－発掘調査と『上宮聖徳法王帝説の裏書』等による－

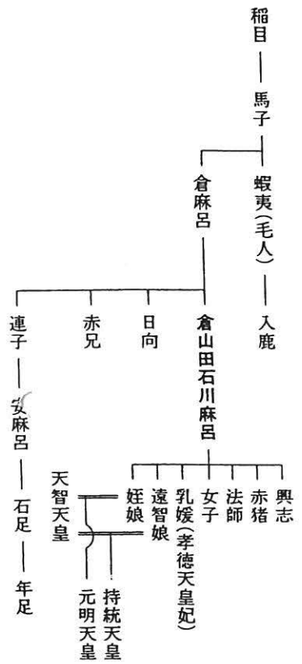
舒明13年(641):浄土寺を始む（『裏書』）
整地
皇極 2年(643):金堂建立

大化 4年(648):初めて僧住む
大化 5年(649):大臣害に遇う

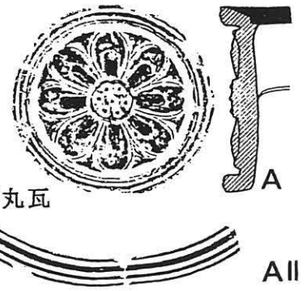
天智 2年(663):塔を構える
天武 2年(673):塔の心柱を建てる
舎利八粒を納める
天武 5年(676):露盤を上げる



天武 7年(678):丈六仏を鋳造
天武14年(685):丈六仏開眼（『裏書』）
この前後に南門を礎石建ちに改修、大垣も改修し、
さらに金堂や回廊を修理（遺構と瓦）
文武 3年(699):封戸300戸を施入（『扶桑略記』）



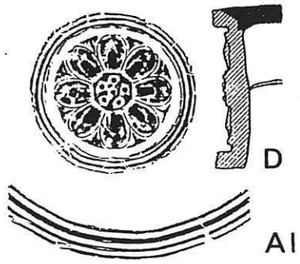
倉山田石川麻呂関係系図



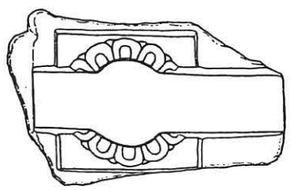
蓮華文軒丸瓦

重弧文軒平瓦

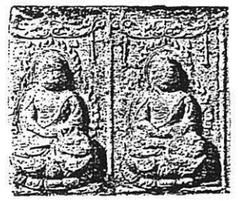
金堂用軒瓦



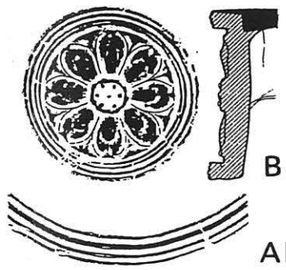
中門・回廊用軒瓦



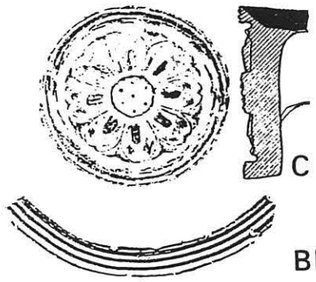
回廊の礎石には金堂と同様に単
弁12弁の蓮華座が刻まれている



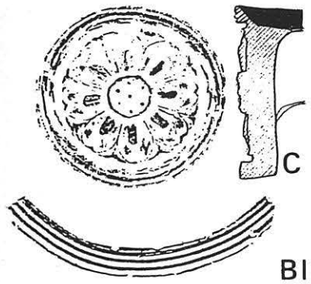
塼仏



大臣存命中に作
られた塔用軒瓦

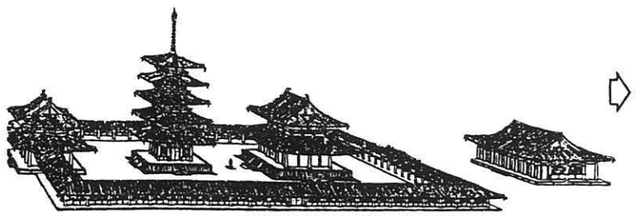


造営再開後に作
られた塔用軒瓦



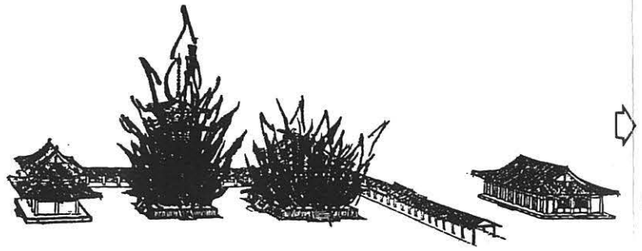
講堂用軒瓦

丈六仏

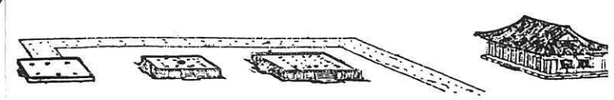


天平11年(731):石川年足が大般若経を施入
この頃、金堂や塔を修理し、さらに回廊の内側を瓦
敷にする（瓦と土器）
9世紀前半～中頃に回廊を大改修（遺構と土器）
10世紀前半に回廊の内側を礫敷とし、さらに倒壊し
た東面大垣を土塁に改修（土器と銅銭）

10世紀末頃に東面・南面回廊が倒壊（土器）
治安3年(1023):藤原道長が堂塔をみる（『扶桑略記』）



12世紀後半に塔と金堂が焼失（焼土層と土器）



文治3年(1187):興福寺衆徒、薬師三尊像を奪い、
東金堂に移す（『玉葉』）

南面回廊の調査成果

1　創建時の南面回廊

南面回廊の礎石と柱間寸法　南面回廊の南側柱（外側の柱列）の礎石はすべて完全で、出隅（東南隅）から5間分計6個を創建当時の位置で発見することができた。北側柱（内側の柱列）の礎石は入隅（内側の曲がり角）とそこから西へ1間分の計2個しか残されておらず、さらに西の礎石は近代の東西流路の掘削に伴って抜き取られていた。その抜き取り穴が水路の底で2個みつかっている。柱間寸法は桁行・梁行ともに3.78m（高麗尺1尺＝36cmで10.5尺）等間であるので、北面回廊の中央2間分（推定門の位置）を除き、等間であることが判明した。ちなみに回廊建物規模は東西84m、南北87m、南面東西回廊は各9間、北面回廊は22間、東面・西面回廊は各23間である。

礎石の石材は花崗岩である。北側柱の礎石は方座の上に単弁12弁の蓮華座を彫っており、南側柱の礎石には蓮華座の両端に幅27cmの地覆座（そこに地覆材を置いて壁や窓を支える）があるので、蓮弁は10弁である。方座の上辺は約65cm、蓮華座の上面径は約42cm、高さ約7cm。したがって、南面回廊は南側に壁や連子窓を設置し、北側は柱だけで解放状態である。なお、南面回廊南側柱東端に北面回廊と同様に扉口があったかどうかは、地覆石が抜き取られているので不明である。

南面回廊の基壇の大きさと構造　基壇の外装（縁石）は東面回廊と同様に、花崗岩の自然石が使われており、ほとんどが現位置に残されている。その外面は従来通り、南側柱礎石心から1.3mの位置にあるので、基壇幅は6.38mに復元できる。南面の縁石の高さは東面縁石より10cm前後高く、約50cmである。基壇の構造は、地山の砂層の上に花崗岩の風化土を盛って整地し、さらにその上に厚さ3～4cmの版築層を数枚積み、基壇土とする。整地土と基壇土の厚みは計約80cm。基壇上面は土間のままである。

南面回廊の瓦　軒平瓦は従来通りＡＩ種が多数残されているが、従来より回廊所用とされている軒丸瓦Ｄ種と垂木先瓦Ｄ種の出土量は目下非常に少ない。今後、縁石外の調査が進めば、それらが基壇外側の創建時の路面上に残されている可能性もある。東アジアでも山田寺でしか見つかっていない双頭鴟尾は回廊の４つの隅の屋根に置かれたものだが、東南隅のある本調査ではまだみつかっていない。丸瓦と平瓦は創建時の特徴をもつものが大多数を占める。

南面回廊の創建年代　蓮華座を施した礎石と瓦の特徴からみて、南面回廊は石川麻呂存命中に基本的に完成していたであろう。

2　その後の南面回廊

回廊の改修　地覆の下に地覆石はなく、これを抜き取ったとされる溝が、東面回廊と同様に確認されている。北面回廊や西面回廊は基壇上面の削平が甚だしいので、この痕跡が残っていないのであろう。本来回廊全体で地覆石を抜き取り、回廊を大修理したのである。東面回廊では地覆の下に石の代わりに瓦を重ねて置いているが、南面回廊の場合、地覆の下には瓦を置いていない。地覆と基壇上面との間に土をいれたのであろうか。それとも礎石の地覆座によって支えたのであろうか。ともあれ改修後の地覆はきわめて軟弱だったのである。

回廊東南隅の一間×一間の空間では、西の礎石間の中央に地覆座を作出した石が、南の礎石間の中央には花崗岩が、入り隅の礎石の東辺中央には切石が、それぞれ置かれている。類似の現象は回廊東北隅（第8次調査）でも認められる。それは少なくとも創建時の仕事ではありえず、おそらく地覆石を抜き取った頃（平安時代）の仕事であろう。その目的としては、床張りにした、壁を設けて小部屋とした、構造上脆弱になった回廊を補強したことが考えられる。

礎石の沈下　回廊東南出隅の礎石上面の傾きは肉眼でも明確にわかるほどで、東に2～3cm傾いている。これが倒壊時の姿を留めているとすれば、回廊倒壊の間接的原因といえよう。不等沈下の問題は、今後南面回廊の礎石全体で検討したい。

埋まりかかっていた基壇縁石　回廊倒壊時に落下した瓦は、基壇面と縁石を覆うように分布しており、基壇外の創建時の路面上には達していない。このことは回廊倒壊以前に縁石がすでに埋まりかかっていたことを示している。現に縁石外の堆積土は砂層と腐植土層の互層6枚以上からなる。

抜け落ちたままの瓦　回廊の倒壊時に基壇上に落下した瓦には、軒丸瓦がほとんど含まれていない。倒壊までの約350年間に、多数が抜け落ち、その後補足されなかった。垂木先瓦も非常に少なく、回廊倒壊時にはほとんど垂木についていなかったことがわかる。南面回廊の最終段階の屋根は、丸瓦と平瓦と若干の軒平瓦で葺かれていたのである。東南隅に置いていた双頭鴟尾は奈良時代の回廊修理の際に屋根から降ろされ、割られて瓦敷の材料となったらしい。

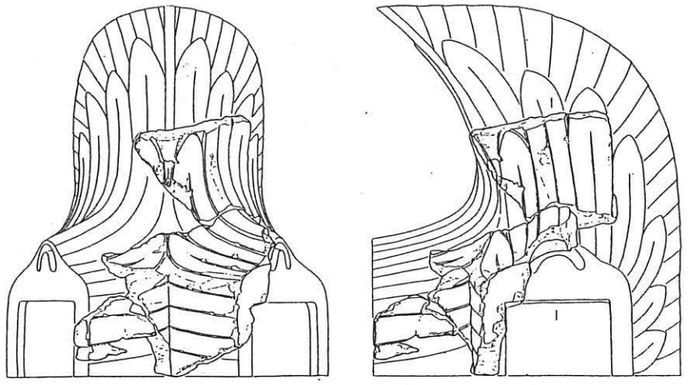
3　南面回廊倒壊

瓦と部材の在り方からみて、南面回廊は東面回廊とともに倒壊している。瓦堆積の分布は基壇幅の中におおむねおさまるので、屋根は瓦はほぼ下に落下したとみられる。瓦堆積北半は北流れの屋根瓦が落下したものである。平瓦は凸面を上にし、広端を北に向けて数枚重なっているので、棟側から瞬時に落下して反転したのである。それらの下には凹面を上にし、玉縁を北に向けた丸瓦も並んでいる。調査区東端には東面回廊東流れの瓦が反転した状態にある。これに対して、南面回廊南流れの瓦は軒平瓦瓦を中心に、真下に自然落下したものが目立つ。凹面を上にし、瓦当面を南に向けているからである。瓦は基壇上面に直接落下したものは少なく、ほとんどの場合直下に5～10cmの砂層を挟んでいる。この砂層こそが回廊倒壊の直接の引き金となった東の山側から押し寄せた土砂であろう。その年代は従来瓦堆積などに含まれる土器の年代から、10世紀末頃と考えられている。本調査で基壇上面から出土した最新の土器は、目下9世紀代のものである。

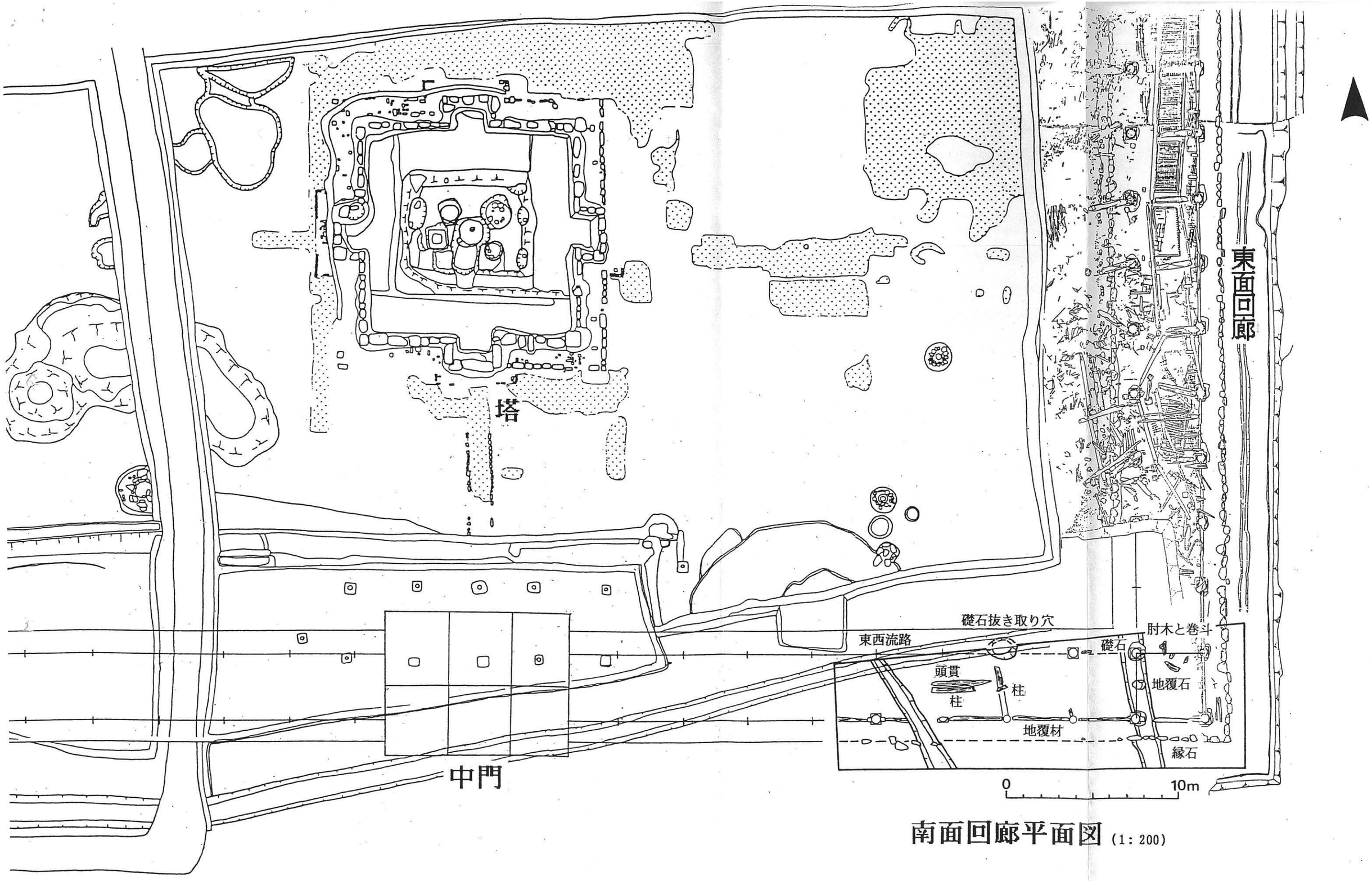
垂木先瓦Ｄ種

軒丸瓦Ｄ種

軒平瓦ＡＩ（1:5）

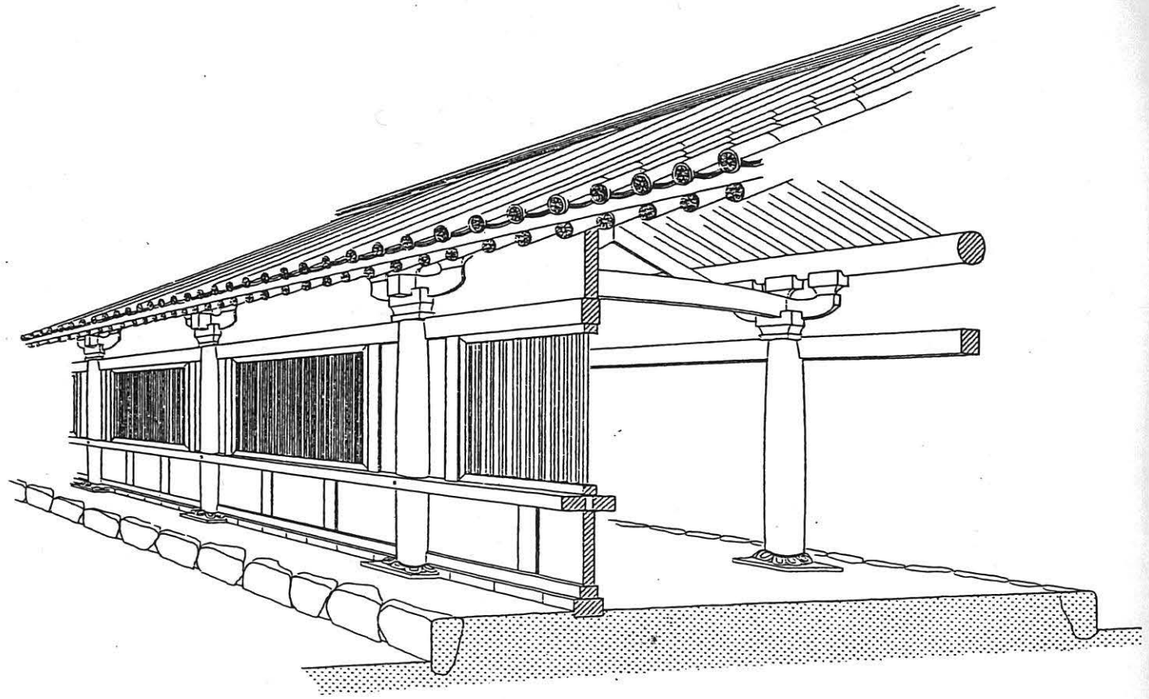


双頭鴟尾（1:20）



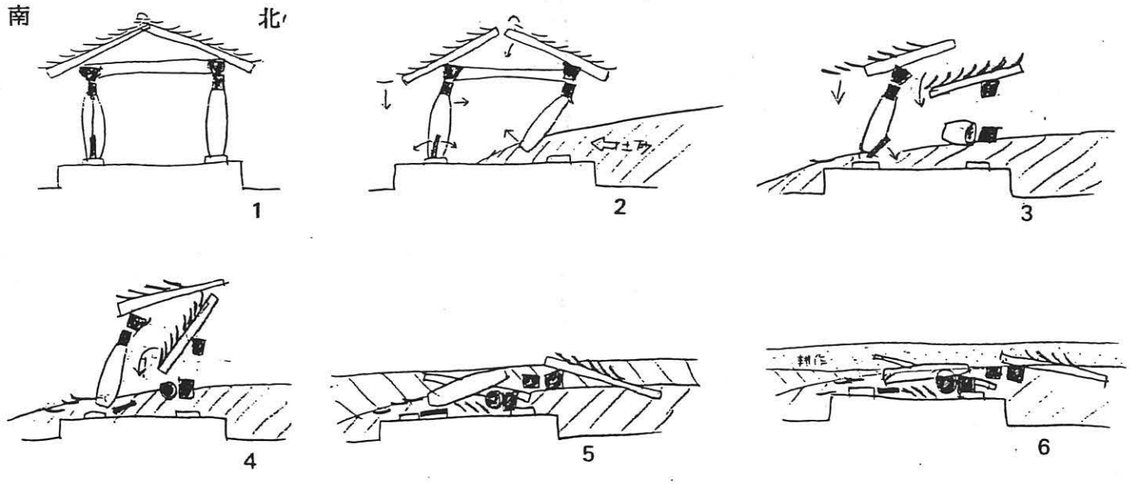
南面回廊平面図 (1：200)

南面回廊発見の部材と倒壊の過程

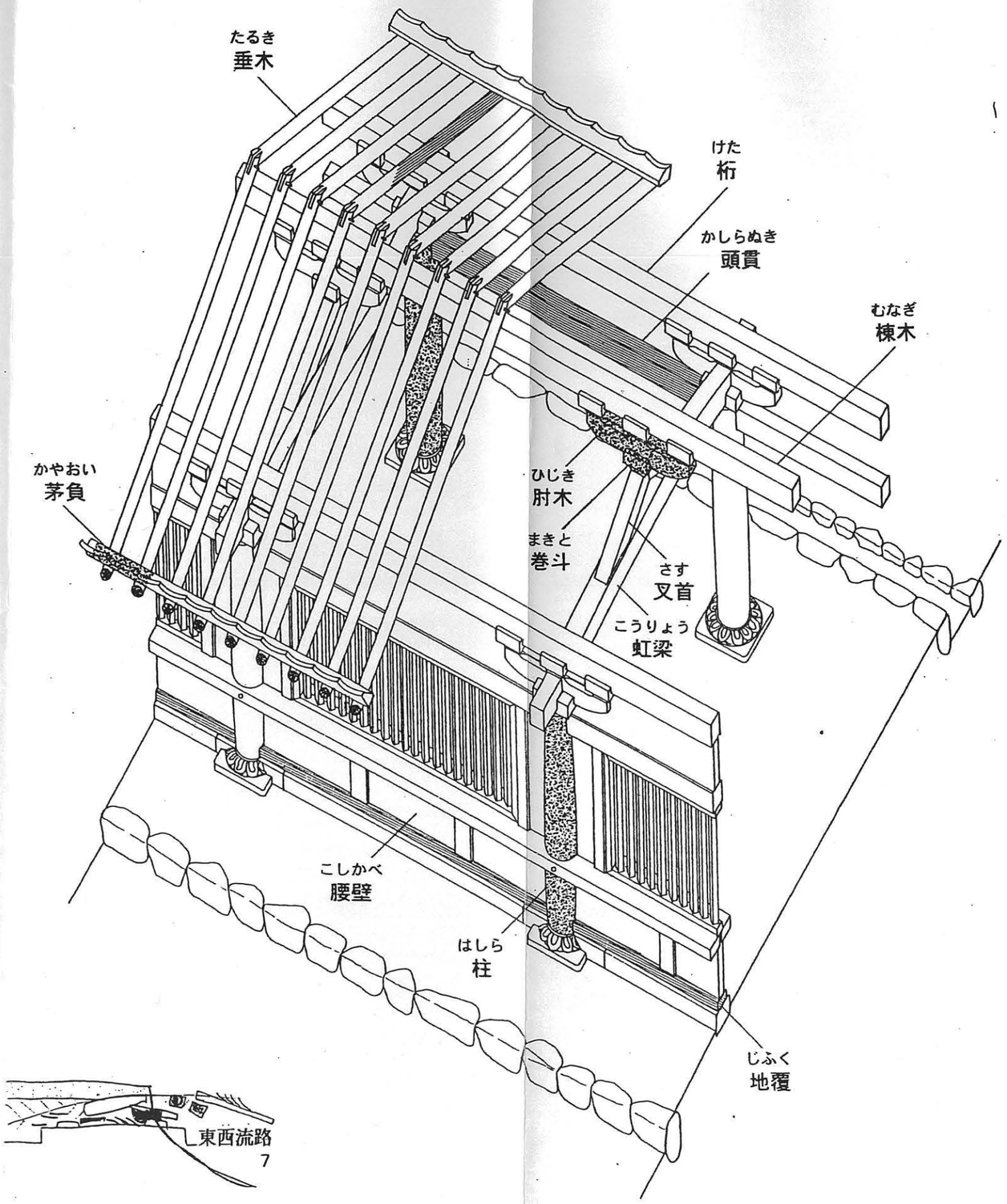


南面回廊を東南からみたパース

南面回廊は、東北からぎた土砂によって北の柱が倒されて倒壊した。土砂量は西に行くほど減ったはずで、倒壊も西では緩やかだったと思われる。そのため全体は複雑な倒れ方をした。下図は東から２～４間の倒れ方を現時点で推定し、簡略に描いたもので、回廊全体の倒壊の様相はなお不明な点も多い。



南面回廊の倒壊過程の模式図



南面回廊を上からみた図

（網をかけたところは、今回出土した部材が本来あったところ）